

第6章 都留市の産業について

社会調査・地域調査 B 産業班

メンバー： 櫻田俊基 齋藤文也 佐野 匠 清水優一

6.1 はじめに

問題関心

都留文科大学の学生は全国から集まり、下宿生活をしている学生がほとんどである。そして都留で暮らす以上、都留市の商業や産業と関わりなしには生活していけない。そこで、都留市の産業について調べることにした。

調査の課題

産業班では、おもに農業・商業に注目しながら都留の産業について知ること、および、伝統的な商業などにも視点を向けて幅広い視野で都留を見つめること、を調査項目にあげている。また、都留の伝統的な産業は何か、都留を代表する農産物は何か、都留のアルバイト事情はどのようなものであるか、などの点を明らかにしていくことも調査の課題に含まれる。

6.2 都留市の産業

特色と移り変わり

都留市の産業の特色と変遷についてみていこう。都留の産業は、かつては絹織物をはじめとする繊維工業が、そして現在では機械金属工業が中心となっている。都留市では古くから養蚕が行われ、甲斐絹に代表される繊維工業が発達し、1960年代の半ばぐらいまではこの繊維工業が産業の中心的な地位を占めていた。その後、繊維工業は衰退し、かわりに機会金属工業を中心とする製造業が都留市の主要な産業のひとつに成長してきたのである。しかし、繊維工業は完全になくなってしまったわけではない。今でも絹織物を扱う店が都留市には点在する。このほか、現在の都留市では、観光産業や、富士の天然水を利用した水菜を代表する農業も盛んである。

市内の施設

都留市には、「市内まるごと博物館構想」に基づいて、都留の歴史や文化を親しみやすく学習でき、市民どうしの幅広い交流を大切にする施設として、「増田誠美術館」や「尾懸郷土資料館」「宝の山ふれあいの里」「リニア見学センター」などがある。また、恵まれた自然のなかで、市内各所に点在する史跡などを探訪し学ぶことのできる拠点として、都留市博物館「ミュージアム都留」が完成し、1999年4月にオープンした。

都留市の産業を考えるうえで、都留文科大学が重要な役割を担っているといえる。大学所在地を中心にさまざまな学生住民が集まり、それが地域へとつながっていく。大学前には「文大通り」という商店街があり、飲食店、美容院、カラオケ施設、ボーリング場など、数多くの店が並んでいる。都留

文科大学は、何よりも、地域との深いかかわりをもっていることに特色がある。たとえば、2004年度に新設された大学附属図書館は、一般の市民にも利用が開放されている。また、夏季にはプールも市民に一般開放され、大学キャンパス中庭の通称「赤の広場」は、休日には家族連れでにぎわう光景もみられる。

6.3 都留市における機業生産

日本中、どこの町にも名物がある。ならば、山梨県を代表する特産物とは一体何だろうか。このことは、都留市で学生生活を送る筆者にとって非常に興味深いことであった。

いろいろと調べていくうちに、山梨県の名物というと葡萄、絹織物、水菜の3つがあることがわかった。そのうち、都留市との関連で考えると、絹織物と水菜の2つに絞られてくる。そこで筆者は今回、都留市と絹織物について調べることにした。文献調査で得た情報にもとづいて、おもに、「郡内織物」の歴史（明治期から大正期まで）やその特徴についてまとめることを目指したいと思う。

風土がもたらした郡内織物

都留市を含む山梨県東部の地域を「郡内」（ぐんない）と呼ぶ。この地域は、桂川周辺にわずかに存在する平坦な土地を除き、そのほとんどが山々に囲まれているという地形である。それに加えて、富士山山麓の厳寒な気候とそこからもたらされる火山灰土により、この地域の人びとが農業のみで生計を立てることは至難の業であった。このような過酷な自然環境のなか、停滞する農業生産の穴を埋め合わせる手段として人びとは絹織物を織りはじめたのである。このような経緯で郡内地域での絹織物生産は産声を上げ、「郡内」という言葉はいつしか地名を表すだけではなく、その地域で織り出される絹織物をも指すようになっていった。

「カイキ」の由来

郡内織物の別名を「甲斐絹」（カイキと読む）という。甲斐絹は元来、「カイキ」の愛称で人びとに親しまれており、その漢字表記も存在していなかったようである。この漢字が使われるようになったのは、カイキが郡内地域の強力な地場産業になると見越した明治時代の初代山梨県知事の藤村紫郎氏が、カイキに「甲斐絹」の字を宛てたのが始まりだといわれている。しかしこの説にも確固たる証明があるわけではなく、この出来事が明治のいつ頃の話だったかもわからないままである。このほかにも、次のような2つの説がある。そのひとつは、1600年頃にインドから日本に伝わった絹織物を「海気」（カイキ）と呼び、郡内織物もこの海気を参考にして製作されたため、「郡内海気」の名称が定着した、という説である。もうひとつは、藤村氏が、「甲斐絹」ではなく「甲斐の国」から字を宛てて甲斐絹（カイキ）と名付けた、という説である。いずれにしても、真相はわかっていないようである。

北都留郡・南都留郡における機業

南都留郡の機業戸数は1894年（明治27年）に5,370戸あったが、その後の数年間は不安定な増減を繰り返した。しかし、明治の終わり頃から急激に増え始めて、1915年（大正4年）には6,720戸にまで増加し、その4年後には7,078戸に達したが、1920年（大正9年）頃からは再び減少に転じた。このことから、南都留郡での機業戸数は5,000戸を基点に増減を繰り返したことがわかる。この現象

は機業を副業として始めた兼業農家が、機業の景気に合わせて開業や休業をしたことが原因の一つであるとみられている。

いっぽう、北都留郡での機業戸数は明治 20 年代から 30 年代まで 4,500 戸～4,800 戸と横ばいで推移したものの、1908 年（明治 41 年）にピークを迎え 5,029 戸を誇った。しかし、大正に入ると一貫して減少を続け、その後、5,000 戸を超えることはなかった。こういった状況は、地域によって織物生産の比重が異なっていたことを示している。

機業と女工

郡内地域での機業においては、女工の比率の高さが特徴的である。明治期は北都留郡、南都留郡ともに女工が機業従事者のほぼ 100%を占め、昭和に入っても 70%を切ることは一度もなかった。これは、機業が農家の内職として行われていたこととも関係する。当時は女工の人手不足が深刻化し、女工の多くが厳しい労働条件（15 時間労働など）のもと機業に従事していた。その過酷さは、1876 年（明治 19 年）に甲府市山田町の雨宮製糸紡績で起こった女工のストライキが証明している。これが日本初のストライキであることは有名な話である。

機械化の影響

日露戦争後の 1904 年（明治 37 年）頃、好景気によって機械の導入や水車設備の普及がはじまった。とはいっても、この頃に導入された力織機は南都留郡で 10 台、北都留郡で 2 台ほどだったという。1919 年（大正 8 年）頃になると、南都留郡、北都留郡ともに 1,000 台ほどの織機が導入された。しかし、南都留郡での 1 戸あたりの平均所有台数はわずか 1.65 台だった。かたや北都留郡では、昭和に入ると織機の普及が進み、5 台以上の織機をもつ事業者も 2 割ほど存在した。設備に差が出始めると、家庭内での零細生産と工場設備による生産との 2 つの体制にわかれていった。しかし都留での機業は基本的には前者の方式で行われた。甲府市などでは織物の生産が工程ごとに分業化されていたが、都留などの生産規模があまり大きくない所では 1 つの事業所が全工程をまかっていた。

機業の現在

山梨県（都留市）を代表する産業である郡内織物も、第二次世界大戦の影響や中国・韓国から安く輸入される絹糸に押されはじめたことで衰退の動きをみせている。実際、1960 年に 39,000 戸あった機業農家は 1998 年には 165 戸にまで減少してしまった。養蚕をやめた農家の多くが果樹栽培へと切り替え、現在もその傾向は変わらないようである。

考察と感想

都留市で生産された絹は品質が優れていて、大阪などでも評判だったという。それだけではなく、日本初のストライキなど郡内織物によるさまざまな影響が今も多く日本に表れているように思えた。筆者自身は絹との関わりがほとんどないものの、今回の調査で少し郡内織物について知ったことで、いくばくか親近感や愛着が生まれた気がした。かつては機業に携わる女工の多くに悲劇をもたらした織物生産であるが、現在では、力仕事である農業を引退した人の第 2 の仕事として密かに注目されているようだ。産業の意義が利益を生むことにあるのは当然のことかもしれないが、地域密着という点を活かすことはできないものだろうか。

6.4 畑作からみる都留市の農業

畑作の農業統計

現在、都留市には耕地面積が76haあり、そのうち普通畑が70ha、樹園地が5ha、桑園が1haとなっている。そのうち桑園はほぼ放棄されており、樹園地では梅が3ha、収穫量3トン、栗が2ha、収穫量2トンをしめている。普通畑では上位3種が、バレイショ（春植え）24ha（収穫量396トン）、未成熟とうもろこし（スイートコーン）26ha（215トン）、だいこん10ha（185トン）となっている。ほかにも、かんしょ・大豆・さやいんげん・小豆・トマト・きゅうり・なす・かぼちゃ・ごぼう・サトイモ・ねぎ・にんじん・たまねぎ・きゃべつ・白菜・レタス・やまいも・ハウレンソウ・陸稻などが栽培されている。このなかでもバレイショとスイートコーンは主要作物として出荷されている。また、耕地面積の減少が著しく、1965年（昭和40年）には451haあった普通畑も、1985年（昭和60年）には91haと約5分の1の面積しかなくなり、さらに、2000年（平成12年）には45haと2分の1に減ってきている。

都留市の農業の特徴

都留市は山に囲まれ自然の多い街だ。山間部に立地しているため都留市の全面積の85%が山地で占められている。その山がちな地形のため、平坦な農業に適する土地が少なく、平坦な土地の多くは住宅地や田に利用されている。そのため畑は、平坦な土地のほか、作物を育てるには便利とはいえない傾斜地や山間部などにも多くある。山梨県で有名な農作物といえばブドウなど果樹があげられる。そして、山梨県全体の農作物の出荷状況をみると果樹（ブドウ、桃、梨）などがかなりの割合をしめている。しかし、都留市の場合はこちらの果樹はほとんど生産されていない。ブドウは昭和40年代にもっとも栽培が盛んだった（昭和45年で栽培面積2ha、収穫量17t）。その後、徐々に栽培されなくなっていき、1979年（昭和54年）からまったく生産されていない。桃も昭和30～40年代にピークを迎え（昭和35年で栽培面積9ha、収穫量49t）、その後、ブドウと同じくして1979年（昭和54年）にはまったく生産されなくなった。また稲作を中心に農業を営んでいる人は少なく、ほとんどの人が稲作を中心に従事している（販売農家数112戸、稲作中心83戸）。山梨県内の他地域と都留市を比べると、自給的農家の数が多く販売農家の数が少ないことが特徴だ（自給的農家数885戸に対して販売農家数397戸）。また、販売農家のなかでも土地の面積が小さい農家が多いことも特徴にある。そのため、売り上げも少なく、販売金額15万円以下の販売農家はその過半数をしめている。このように、都留市の農家は出荷するためではなく自家消費のために畑作（家庭菜園）を行っている人が多いようだ。

桑と養蚕

都留市は山間部独特の狭い農村地域であったため、昔からその独特の傾斜地形をいかして養蚕が行われてきた。その理由としては、桑の木は比較的どんな土地でも栽培がしやすく、ほかの作物が育ちにくい傾斜地にも問題なく育つことがあげられる。また、あまり手をかけなくてもいいので、稲作の副業として便利だった。また、大量消費地（東京）の近くに立地していたため輸送にも便利だった。このような条件がかさなって、都留では養蚕産業が発達し、それに伴い桑園も広がっていったと考えられる。

江戸時代には、江戸や大阪などの大都市で町民などの経済力が大きくなり、都留で生産される郡内絹はととも重宝された。全国に名を広く知られていた、その都留の絹も明治、大正、昭和、平成と時

代が移り変わるにつれて徐々に衰退していく。それにしがい、絹織物生産に必要な蚕の飼料となる桑の生産も減少していった。1965年（昭和40年）に292haあった桑園は、1985年（昭和60年）には102haとなり、現在、都留市における桑園の面積は1haしかなく、またその1haの桑園は農業地としてはほとんど放棄されている。この桑園の衰退はかなり急激で、都留の農業事情に大きな影響をもたらしたと考えられる。

6.5 稲作からみる都留市の農業

文献調査で得た情報にもとづいて、都留の稲作事情についてまとめてみよう。

稲作の農業統計

『農業センサス累年統計書』によると、2000年の時点で、農業経営組織別農家数の販売農業における単一経営農家数で、都留市は県内で11番目に位置している。都留市内の全農家における土地利用の状況は以下のとおりである。

経営耕地

総面積344haのうち234haを水田が占めている。実農家数1,281戸のうち1,132戸を水田が占めている。

借入耕地のある農家数と借入耕地面積

総面積25haのうち16haを水田が占めている。実農家数200戸のうち128戸を水田が占めている。

貸付耕地のある農家数と貸付耕地面積

総面積23haのうち17haを水田が占めている。実農家数156戸のうち110戸を水田が占めている。

耕作放棄地¹

面積74ha 実農家数405戸

耕地以外で採草地、放牧地として利用した土地²

面積5ha 実農家数14戸

また、兼業農家の数が多いことも都留の特徴として挙げられる。山梨県全体に占める割合としてみた場合、収穫量は多いといえるが、農家の全体数は減少傾向にある。過去10年間に減少した耕地の現状をみると、道路や住宅敷地などに転用された耕地が半数、耕作放棄地となったものや原野化したものが残りの半数を占めている。

稲作状況

都留市の農地の半分以上は水田として利用されており、1980年（昭和55年）当時、農地の57%を占めていた。そのほとんどが他県への出荷用ではなく、自給用とされている。とはいえ、山梨県全体

¹ 以前耕作したことがあるが、調査期日前1年以上作物を耕作せず、しかも、この数年の間に再び工作する意思のない土地

² 耕地以外に自家で保有している土地を調査期日前1年間に飼料用に採草したり、放牧またはけい牧地として利用したもの

でみると、水田の作付面積は東京に次いで2番目に少ない。したがって、県内では米が不足しがちで、移輸入に頼っていた。しかし、米の収穫量の水準をみると、面積の割に、県全体での収穫量は全国のそれに比べても相当高く、全国1位、または2位程度の高い収穫が得られていた。

収穫量はなぜ高いか

米の収穫量を左右する要因として、気象条件、土地、品種、耕種法、肥培管理、病虫害防除などが挙げられる。このうち、気温と日照時間は、収穫量と正比例の関係にあると結論づけられている。夏季平均気温の平年差1℃に対し、1斗1升の割合で増減するとも言われている。山梨県南部の気候が温暖な地方（都留もこれに含まれる）でも、気温が稲作に最適な高さであるということはない。稲は熱帯原産の作物であるためである。また、空気の清涼さから影響を受ける日射の強さの度合いや、肥料の施し具合も重要な要因となる。稲の被害のうち最も多いのは気象的災害によるもので、これは防除対策が不可能に近い場合、実に恐ろしいものであると言える。それに次いで大きな減収要素となっているのが病虫害による被害であるが、これは前者とは違い、相当程度まで防除できるものである。しかし、最も恐ろしい病害とされている「いもち病」については、農家によって懸命な防除対策がなされ、各種農業技術研究機関においても品種改良や耕種改善がなされているにも拘らず、むしろ増加の傾向を示している。

都留市は比較的高地に位置しているにも拘らず、夏季の気温が高いために、他の地域と比較しても作物の収穫量が多い。これは山梨県が主に盆地であるためと考えられる。しかし盆地の特徴として挙げられるように、夏は気温が高いが冬は寒いので、冷害も少なくない。そのために、この土地に適した品種を導入したり、品種改良によって寒さに強い種を作ったりするなどの対策がなされており、それにより、決して良い条件とはいえない土地で、比較的高い収穫を得ているといえる。

とはいえ、山梨県全体で見れば、他県に出荷するほど多いわけではなく、自県でのみ消費する程度の量であるうえに、近年の農家の減少や、開発化による耕作地の減少によって、ますます輸入に頼らざるをえなくなっている。

6.6 美富士農業協同組合へのインタビュー調査

調査の実施方法

対象者： 美富士農業協同組合 職員
実施日時： 2004年9月29日（水曜日）
場所： 美富士農業協同組合
質問者： B 産業班 4名（櫻田・齋藤・佐野・清水）

インタビュー記録

* メモをもとに、やりとりの内容をまとめた。

Q：農家戸数は年々減少傾向にあり、また水田、農地面積も減少しています。また、第二種兼業農家数の占める割合が高いのですが、これは気象的、土地的条件が原因なのでしょうか。

A：はい。たしかに気象的、土地的条件が原因ですね。都留市は土地が狭く、そのため、農地も狭い農家が多いですから大規模農業経営もできません。やはり農業だけで生計を立てていくのは

難しいでしょうね。農業を経営しているところでも、自作して自分たちで消費したりする農家が多いですね。

Q：どんな種類の稲が作られていますか。

A：コシヒカリがほとんどです。あとは「ひとめぼれ」がありますね。

Q：なぜコシヒカリが多いのですか。

A：標高にあった作物を作ると自然にコシヒカリになりますね。中間産地で600mがコシヒカリの適切な標高ですが、都留市はちょうどそれにあたります。食味から考えても、コシヒカリが選ばれていると思います。

Q：水菜についてお聞きします。都留市では水菜が有名と聞きましたが、知名度はどれくらいありますか。

A：地元では有名ですね。

Q：全国に出荷しているのですか。

A：そこまでは生産量がありません。出荷はしていますが、富士吉田や大月までです。地元では、おひたしにしたり、お正月のお雑煮のなかに入れたりして食しますね。

Q：私たちは水菜と聞くと京水菜を思い出しますが、やはり京水菜とは違いますか。

A：そう…、違いますね。形から違います。都留市の水菜とは種から違いがあります。それから、ここでは富士の天然水を利用した独自の生産法をとっています。

6.7 都留市のアルバイト事情

都留市のアルバイト事情について「Yumex」「Yell」などの山梨県内の求人情報雑誌を使い、調査していきたいと思う。

まずは都留市内ではどのようなアルバイトの求人があるか。ファミリーレストラン（接客係、調理係）、リゾートクラブ（フロント、売店ショップ、レストランサービス、レストラン洗い場、調理補助・調理、スポーツ受付・管理、予約業務、一般業務）、花の工房・A株式会社パピック事業部、雑貨屋、コンビニエンスストア、劇場事務職員、カー用品の販売・取り付け、マシンオペレーター業務、化粧品の包装作業、機械の製造業務、旅館、家庭教師・塾の講師、ガソリンスタンド、などがある。これらのなかには学生だけでなく、30歳以上の人を雇うところも少なくない。

次に、労働条件についてなどのようになっているか。コンビニエンスストアやファミリーレストランでは「時給700円から」が平均である。また、深夜の時間帯では約2割増で時給が支払われるようである。甲府市などと比べると甲府市の方が時給は高めである。リゾートクラブや旅館では「日給6000円から」が平均である。家庭教師や塾の講師などは時給1000～1300円が平均である。回数をこなすごとに時給が上がることもある。

また、これらの求人雑誌はスーパーやコンビニエンスストア、ファミリーレストランなどで手に入

ることができる。そのほかにも、アルバイトをしている友人からの紹介や、お店に直接アルバイト募集の張り紙が張ってあるところもある。どこの地域でもそうであるが、気になった求人情報があったらすぐにそこに連絡するべきである。「たった今募集が終わった」という話はそう珍しくはない。

6.8 まとめと考察

調査の結果、都留の伝統的な産業は絹織物（「郡内織物」「甲斐絹」）機業であることがわかった。しかしその絹織物生産も衰退してしまい、現在では機械金属工業が中心となっていることが明らかになった。衰退してしまっただけとはいえ、絹織物を扱う店はまだ都留市内に残っている。

都留市の農業は、大規模で商業的な農業経営ではなく、自家消費のための零細経営をおこなっている人が多いということがわかった。都留市は土地が狭く、農地の狭い農家が多いことにも一因があるようだ。また、山梨県では珍しく畑よりも田のほうが面積も収穫量も多い。都留を代表する農産物は水菜であるとわかった。しかし、その水菜も生産量は少なく、自家用のほか、富士吉田市、大月市まで出荷範囲となっている。また、米の収穫量をみると、面積の割に高い収穫量を示しており、米も第2の特産物としてあげられるだろう。水田ではいわゆるブランド米であるコシヒカリが作られており、これはコシヒカリの栽培気候（標高）に都留市があっていたためである。畑ではスイートコーンやばれいしょが栽培されている。

都留市のアルバイト事情についてみると、市内には数多くの求人がある。なかには学生だけでなく、30歳以上の人を雇うところも少なくない。コンビニやファミリーレストランなどでは、時給相場は他の甲府市などよりも低めであることがわかった。

今回の調査でわれわれ産業班メンバーは、伝統的な産業と農業とアルバイトの3つの視点から都留の産業について調査してきた。調査活動を終えた今、都留の産業とは「都留特有の自然を利用した産業」なのではないかと思う。もちろん、現代の機械金属工業などこれからは隆盛が続くであろうが、昔の都留を支えた絹産業や農業は今も色あせていないのである。「身の丈の産業」…、筆者らはこの言葉が都留にあっていると思った。

参考文献・資料

齋藤康彦、1998、『地方産業の展開と地域編成』多賀出版

農林水産省統計情報部編、2003、『農業センサス累年統計書』農林統計協会

都留市史編纂委員会編、1989、『都留市史 資料編 民家・民俗』都留市史編纂委員会

農林省山梨統計調査事務所編、『農林統計から見た山梨県の展望』山梨統計協会

「都留市役所ホームページ」（<http://www.city.tsuru.yamanashi.jp/>）

「富士吉田市歴史民俗博物館ホームページ」（<http://www.fujigoko.jp/yoshida/history/fabric.html>, 2004年9月3日）

「西桂織物工業共同組合ホームページ」（<http://www.mfi.or.jp/nktex/menu3.htm>, 2004年9月3日）

「養蚕と紬ホームページ」（<http://www.kai.ed.jp/inoue99/index.htm>, 2004年9月3日）

ユメックス株式会社「Yumex」

「Yell」